

[生徒指導]

自己実現するための意欲を育てる学級づくり

— 安心して過ごせる学級は、なりたい自分を目指そうとするエネルギーをつくり出す —

島田 陽子*

1 主題設定の理由

学校は社会の縮小版であり、学級は家庭であり、自分の部屋である。子どもたちはこの学級という家庭の中で、友達と関わりあいながら、心を温めたり、休めたりするなどして、意欲的な学校生活を送るために必要なエネルギーを充電する。また、学級の仲間は家族であり、その仲間たちとともに活動することは子どもたちにとって、大きな意味を持つ。子どもたち同士の関係が円滑で互いに認め合うことができる環境であれば、子どもの学習や活動への意欲は高まる。しかし、子どもたちの同士の関係が希薄で、互いに何を考えているのかわからない状況の中、行われる学級の活動には、意欲も生まれなければ、喜びや達成感も得られないと考える。信頼のおける仲間がいる空間は安心感を生み出し、自身の力を惜しみなく発揮する気持ちを育て、仲間との協力の下に得た体験から感動を味わい、次への前向きな原動力となる。子どもたち同士のリレーションをいかに育むのが重要な鍵となる。

しかし、現代の子どもたちの特徴として、少子化・核家族化・インターネットによるコミュニケーションやゲームの普及などから、人間関係をつくり上げることや対面してコミュニケーションをとること、相手の気持ちを推し量って行動することがやや苦手な傾向があると考えられる。友達と「どのように関わったらよいのか」、「もし、トラブルを起こしてしまったのなら、どのように修復していくのか」という人間関係調整能力などの力が不足しがちに感じる。

私は、3年生を担任している。私が赴任してきた年からの持ち上がりの学年である。現在の子どものたちの風潮として典型的だが、子どもたち同士の関わりが希薄で、互いに遠慮のもとに成り立っており、本音で語り合えない、また、語り合う以前に、相手の主張したことを自身でよく理解する前に、同じ意見を主張する。そのような人間関係の下、人と違う自分を認められない雰囲気がつくりあげられ、人前に出た発表や、リーダー的な役割を敬遠する傾向が強かった。安心して能力を発揮できる環境にないことが、これらの悪循環を引き起こす原因ではないかと考えた。

そこで、学級経営では、安心して過ごすことができる環境にするため、「ルールが守られ、自分の役割を果たすこと」、「子どもたち同士が関わり合わなければならない活動」や、「個が生きる協同活動」を意図的に取り入れるなどして、リレーションづくりや自尊心を高めることに力をいれることにした。子どもたち全員が安心して過ごすことができる学級をつくり、その学級に所属したいという気持ちを育むことを通して、なりたい自分を目指すという前向きな姿勢で取り組むことができる学級を目指したい。このような理由から、以下の実践を行った。

2 研究の方法

(1) 自治的な活動が行われるための工夫

- ・一人一役を担い、与えられた役割を確実に担当が果たすことの大切さを確認する。
- ・当番・役割を明確にし、いつ、誰が見てもわかるようにしておく。多くの目で確認し合う。
- ・意図的に活動を仕組み、特定の仲間で作られたグループの枠を取り払う。
(仲の良い者同士の活動ではなく、普段かかわりのない者同士も関わりをもたせる。)
- ・公平・毅然とした態度で、根気よく、教師が支援する。

(2) 認め合いの場を意図的に設定

【自己肯定感・自己有用感を育てる学級】

- ・自分を知る機会を設ける。

* 南魚沼市立塩沢中学校

(わたしはこんな人間です「自己紹介カードの作成」)

- ・他人を知る機会を設ける。

(「自己紹介・他己紹介・バースデーリング・すごろくで自分を語ろう・なんでもバスケット」)

- ・他の頑張りを紹介・賞賛・激励する機会を設ける。

(頑張っている人を終学活，便り等で紹介・各種大会前の学級激励会)

(3) 子どもたちの絆を育てる学級

- ・班長会議を基盤とした班編成

(仲の良い人でなくとも班員として認め，活動に巻き込んでいく助け合いの心や認め合う心を育てる。)

- ・各種行事を終えての振り返り

(自分自身や自身を取り巻く環境について気づく。)

- ・男女混合の活動

(バースデーリング・各種話し合い活動)

(4) 教師と子どもたちのリレーションのある学級

- ・子どもの表情・変化をつかむ。

- ・声をかけてこない生徒に特別注目する。

- ・自己開示と笑顔で対応

- ・期待値が常に子どもの心に伝わるように (教師と子どもの絆)

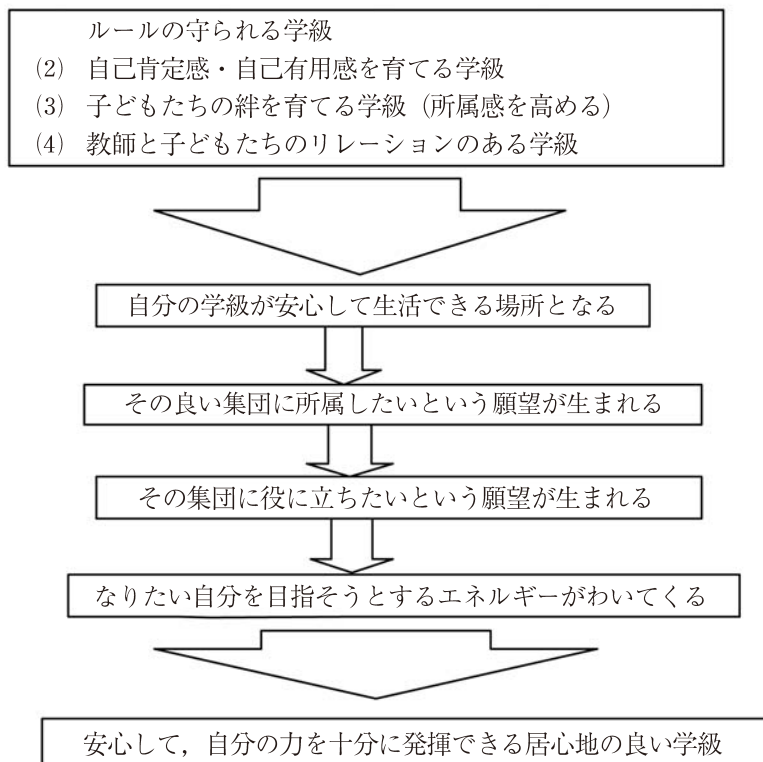
- ・子どもから声をかけてもらったときはチャンス！子どもの欲求・興味をつかむ。

3 実践の概要

- (1) 学級開きで担任の思いを伝え，日ごろの教育活動では継続的に実践する。

居心地の良い学級とは，以下のようなことが当たり前に行われる学級であると考えてる。

【目指す学級像】



【実際に子どもたちに伝えたこと】

こんな学級に。。。

【学級便りより抜粋】

1 居心地の良い学級にしよう。

- ① 自分の活躍の場をもつ。(得意な技術・能力を伸ばす努力をすると同時に相手の頑張りを認めることも必要)
- ② ルールを守る。
- ③ 「1人はみんなのために、みんなは1人のために！」の気持ちを忘れない。

2 一人ひとりが自分の進路を真剣に考え、実現できるよう努力する。

- ・粘り強く取り組むこと。やってみる前からあきらめないこと。



私は、何を置いても、1の「居心地の良い学級」というものは、切り離せません。これは、学校生活すべての原動力となるからです。学級は、学校の中の、自分の部屋です。自分の部屋に居心地が悪かったらどうでしょう？勉強もしたくなくなることもあれば、次の活動へ向かうエネルギーを充電することもできません。だから、皆さんにお願いします。学級の雰囲気はみんなで作るもの。いろんな人がいて当たり前。お互いの良いところを認め合って、伸ばしあうこと。ルールを守って気持ちよく！こんなことに気を回しながら、みんなで、最高の学級を、1年間かけて作り上げていこう！

さて、3年生の皆さんだから、もう1つの目標をお願いします。3年生には、卒業後の進路を決め、実現するという重大な最終目標があります。その目標を達成するために、粘り強く取り組む、やってみる前からあきらめないことです。頑張ってください！私も、皆さんの力が十分に発揮されるよう、一緒に頑張ります！

学級開きでは、1年間自分がどんな姿勢で生徒と向き合うかを伝える大切な場である。心がけることは、1年間継続して貫ける指針を、熱意をもって伝えることである。1-①は自己有用感が得られる学級、1-②はルールが守られる学級、1-③は子どもたちの絆を深める学級へとつながっている。また、話しながら、生徒の反応を見取り、学級の様子や雰囲気などを包み隠さず率直な意見で話すことも、教師と生徒のつながりをつくり上げる上で大切なことだと考える。

(2) 自治的な活動が行われるための工夫

一人ひとりが自分に与えられた仕事を確実にこなすために、一人一役の学級での役割を与えた。仕事を行うのは他の誰でもない、自分ひとりの状況にあることから、自分が仕事をしないと学級全体に迷惑がかかるから、必ずやり遂げようとする責任感が生まれることをねらっている。この取組では、1人ひとりの仕事量を平等に保つことや、分担が全員納得のいくような決定の仕方に配慮する。このことによって、「自分だけがやっている」という不平や反発は避けられ、みんなも頑張っているから、自分もやらなければならないという前向きな気持ちが生まれる。また、仕事を確実に行ったときは、必ず認めてやる。このことは、自己有用感につながっていき、さらに、自分自身で考えて実践しようとする気持ちが育っていくことにつながる。自治的な活動で支えられた学級をつくる基礎は、明確になった仕事を与えることと、任務を果たしたときには大いに認めてやることだと考える。

(3) 意図的に設定した認め合いの場

自分が人の役に立っていることや認められていることを実感することは、自己有用感につながる。

終学活では、様々な委員会活動を行わせた。各委員会からのPR活動はもちろんのこと、応援団委員会は、部活動の各種大会が近づくと、学級激励式の指揮をとらせた。初めての学級激励式では、応援される選手も応援団も恥ずかしがってスムーズには進められなかった。しかし、一生懸命やろうとした応援団にねぎらいの言葉がけを全員で行った。続く2回目の大会が近づくと、子どもたちの中から「激励式をやろう！○○(応援団生徒名)！」との声が出た。当事者の応援団の生徒も、恥ずかしそうではあったが、半ば嬉しそうでもあり、1回目よりまともに激励を行うことができた。皆から、認められることは嬉しいことであり、次の活動への原動力となる。

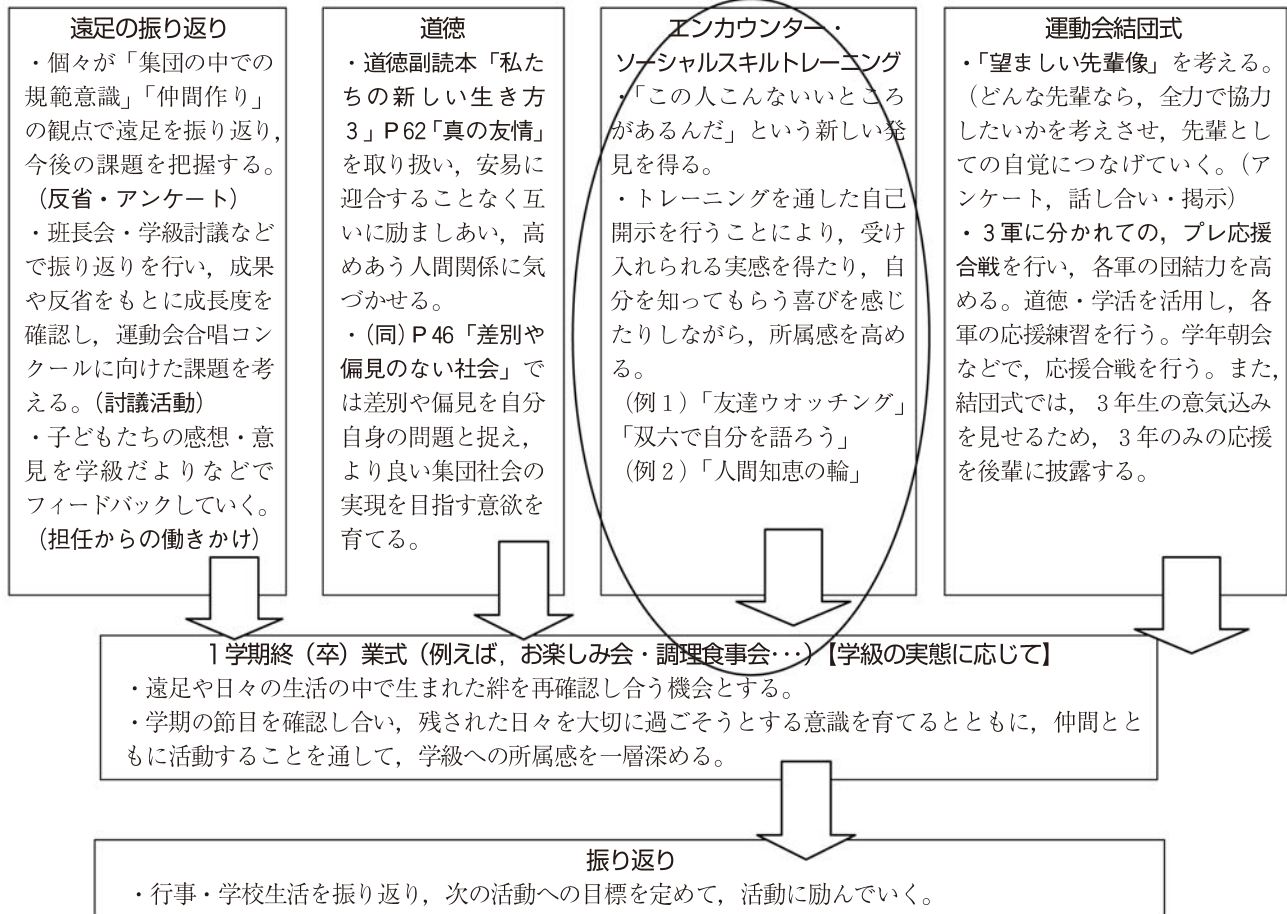
(4) 子どもたちの絆を育てる学級【いじめ防止学習プログラム】

(第2期 5月20日～1学期終業式)

◎ 期待する具体的な生徒像

- 遠足での仲間との交流を通して得た学級への所属意識を継続し、さらに集団としての意識を強固なものとする意識をもつことができる。
- 自分自身をしっかりと見つめたり、他人の内面に目を向けたりして、自他の良いところを把握し合い、温かな雰囲気の中で自己肯定感を高める。
- 活動を通して得た成果や反省を、次の活動に生かそうという意欲が見られる。

◎ 「いじめ防止学習プログラム」の具体的な内容



「いじめ防止学習プログラム」では、様々な場面で、意図的に関わり合いを仕組みながら、子どもたちの信頼関係の下に成り立った人間関係づくりを目指した。

「人間知恵の輪」と称して、クラスメイトが手を離さずに1つの輪を作った。さらに、複雑に交錯して「知恵の輪」を作るまでには時間がかかった。活動が終わっても特別な表情の変容もなく、効果はなかったかと思われた。しかし、後に生徒の「デイリーライフ」(日記)には、「人間知恵の輪楽しかった。またやりたい。」とのコメントが書かれた。また、しばらく後の学活で何をするかとの話し合いで、再びやりたいとの声があがった。この単純な活動に真剣に取り組もうとする姿が現れる。

4 結果と考察

【表1】 Q-U回答 (B・いごちのよいクラスにするためのアンケートより)

実施期	承認得点学級平均点	非承認得点学級平均点
5月初め	31点	15点
6月初め	30点	18点
7月初め	31点	18点
7月後半	31点	16点
9月初め	32点	16点

【表2】Q-U回答（質問内容 勉強や部活動で友人から認められていると思う）

	5 とてもそう思う	4 少しそう思う
5月初め	6人	5人
6月初め	0人	4人
7月初め	2人	5人
7月後半	3人	6人
9月初め	3人	5人

【表3】質問内容（このクラスでよかったなあとと思う）実施時期7月後半

5とても思う	4少し思う	3どちらとも言えない	2あまり思わない	1全く思わない
15人	12人	5人	1人	2人

【表4】保健室利用状況から 4月～9月

	4月	5月	6月	7月	9月
心身の不調	6人	5人	6人	5人	3人
怪我など外科的な処置	3人	3人	3人	3人	1人

【表1】はQ-Uの「いごちのよいクラスにするためのアンケートの集計の結果である。承認得点は6月初旬に少し下がるものの、5月初めより9月（現在）は、1点上昇している。また、非承認得点は、5月初めより、1点上昇した。【表2】では、Q-U回答より「勉強や部活動で友人から認められていると思う」項目について、抜粋した。5月初めは「5 とてもそう思う」が6人、しかし6月初めになると「5」が「0人」となった。当校では、4月に学級編成を行う。したがって、5月の段階での回答は、新しい学級となって間もない頃の回答であるため、昨年度からの生徒の実感が回答に反映されていることが推測される。【表1】【表2】から、5月にとったアンケートより、6月にとったアンケートの結果が思わしくないのは、同じ学級にしながら、互いをよく知らないことから、関わり合いに遠慮が生まれることによりリレーションがなく、学級自体の雰囲気さがごちなく固いものであったこと、学級全体が円滑に機能しなかったのではないかと考えられ自身の学級経営を反省する。

【表3】は7月後半にとった学級独自のアンケート結果である。「このクラスでよかったなあとと思う」という質問に、最高5点のところを、10点をつけた生徒がいた。その生徒が【表2】の質問に対して答えた回答は、4月当初は「4」、後半になるにつれ「5」と変容していった。学校生活では、部活動の活躍があり、学級でも部活動の学級激励会、学級報告会などで賞賛されたり、人前で物怖じせず発表することが上手なことから応援団長に推薦されるなどということがあったりした。自己有用感を十分に得られるようになっていたと考えられる。さらに、1学期の終業式を企画する際、その生徒は積極的に意見を発表したり、実際のレクリエーションの場面でも、活動に消極的な女子生徒にボールのパスを行い、活動に引き込もうとしたりするなど、前向きな働きかけを行っていた。また、運動会の応援リーダーとして、軍の応援がうまくまとまらないときも、あきらめたり、他人のせいにしたりするのではなく、仲間を受け入れてすべての仲間を巻き込みながら、前向きに活動する姿が見られた。運動会後の感想では、「自分の軍は最初、あまりまとまりがなかった。でも、その自分の軍をまとめられない自分も嫌だった。次第に協力が集まり心強かった。結果は、3位だったけれど悔いのない運動会になった。」という内容の作文で自己の活動を振り返っている。

また、アンケート結果では特別変容を確認できなかったが、他にも取組の態度が歴然と変化した生徒が他にもいる。4月当初、リーダーになってほしいと期待する生徒が、自分にはリーダーになる気がないという断固たる姿勢を示した。しかし、その生徒は、リーダー選出で級長として絶大な信頼を得て推薦で上がり、不平を口にしながらも級長を引き受けることとなった。4月当初は、嫌々ならされた級長であるため、積極的な仕事ぶりではなかったが、そのような中でも、与えられた仕事は確実にこなすなどの良い点も認められた。リーダーとしての苦労もあったことを鑑み、担任として感謝と期待の気持ちを伝え続けた。次第に、その級長は、やらされている級長から、「自分しかやる人がいない」と私に話すようになり、やる気のある級長へと変容していった。運動会では応援団に推薦され、団長を引き受けるまでに時間は要さなかった。皆から必要とされているということが本人自身よくわかってのことだと考える。また、認められ

ることで、前向きに活動しようというエネルギーを得ていたと考えられる。運動会では、自分なりに工夫しながら軍を率いて総合優勝を勝ちとり、達成感に満ちた表情を見せていた。その生徒は、運動会後の感想に次のような感想を残した。『「団長」は、最初は嫌だったけれど、運動会は個人のことでなく学校全体のことで。皆を引っ張っていくために自分の行動から変えていこう。必死で指示を聞こうとする団員を前に、絶対優勝しようと思った。』という内容だ。級長としての、確固たる地位を築き自己有用感を得たその生徒は、安心感を得て、次のステップである、集団の役に立ちたいという願望を抱くようになったと考えられる。その証拠に、個人レベルではなく、集団（学校全体）レベルで活動しようとする意志を作文から読み取ることができる。

【表4】は保健室利用状況である。自学級の分析をしてみると、9月の利用者が他の月と比較して極めて少なくなった。頻繁に保健室利用をする生徒がいるのだが、一方で、放課後の部活動となると不満をもらしながらも継続的に取組み、部活動の大会では成果を上げることがあった。勝ち進むにつれて、練習にも根を上げることが少なくなった。正確には、根を上げにくい状況となった。部活動では皆が上を目指して練習する雰囲気であるからということ、学級では、放課後の活動に出るのに、授業やその他活動に参加しないという状況は作りにくくなったということから、不満はもらしても、我慢して活動に参加することが多くなっていった。他人から認められていること、必要とされていることは、新たなエネルギーを生み出すことの証明だといってよいのではないか。

5 まとめ

エンカウンターや、学級の活動として仕組む活動には、中学生という成長の過程では、素直に取り組むことそのものが恥ずかしいと感じる生徒が多い。しかし、子どもたちは、皆が平等に取り組むことが約束されることや、ゲームという制約（ルール）の中で守られながら、相手とのふれあいを楽しんでいく。ルールが守られることにより、安心して自身の力を最大限に発揮できるようになることの証明でもある。このことは、学級生活でも同様のことが言える。「ルール」が守られる学級は落ち着いた雰囲気を作り出し、安心感を与える。皆が守る「ルール」であるから、守ろうとする人が1人また1人と増える。そのような学級は自主的に自分の役割を果たす生徒を育てるのである。

班編成や席替えを決めたいがために班長になった生徒がいた。与えられた仕事は学習係で、仕事として各班の学習時間調査をしなければならなかったが、計算が苦手なため、仕事を聞くなりあきらめて放棄しそうだった。しかし、級友の一生懸命な家庭学習の取り組みを知ったことや、皆が学習係の班長と認めてくれたことで投げ出せなくなり、学習時間を集計する仕事を1日かかってやり遂げた。計算は間違っているけど、その仕事ぶりを褒め、計算機を貸して励ますなどした。その生徒は、今まで見たこともないほどの責任をもって仕事を果たすようになっていた。

子どもたちは、自分の役割を果たすと、誰かに認めてもらいたいという願いを強くもっている。果たした役目を他人から認めてもらうことにより、喜びが生まれ、自己有用感を得ることができる。認められることで、その集団に愛着がわき、さらに役に立ちたいという願望が生まれていき、自治的な活動がさらに活発化していくのである。こうした活動の積み重ねが、集団の安心感となり、所属したいという願望となり、集団に役に立ちたいから自身の仕事を確実に果たす意志となる。そして、なりたいたい自分を目指して努力するという自己実現へのエネルギーにつながっていくのだと考える。

今回の実践では、学級には必ず存在する消極的な関わりの生徒に対してアプローチが少なかった。他人から声をかけてもらっても、あまり気が乗らず、関わりを持とうとしなかったり、関わりを持ちたくてもどのように表情に表現して良いのかわからないまま時間を過ごしてしまったりする生徒たちへの対応である。

そのような生徒は、自己肯定感が低いことがQ-Uの結果からも見て取れる。リーダーとサポートしようとするフォロワーの関係をよく見取りながら、生徒へフィードバックできるよう対策や方法を考えていきたい。

参考文献

- 諸富祥彦 植草伸幸 『エンカウンターで学級づくり スタートダッシュ！中学校編』 図書文化 2002年
 河村茂雄 粕谷貴志 鹿嶋真弓 小野寺正己 『Q-U式学級づくり 中学校 一脱・中1ギャップ「満足型学級」育成の12ヶ月一』 図書文化 2008年